



第78号 通巻14巻第5号

1995年2月15日 発行

守山市立埋蔵文化財センター

☎ (0775) 85-4397

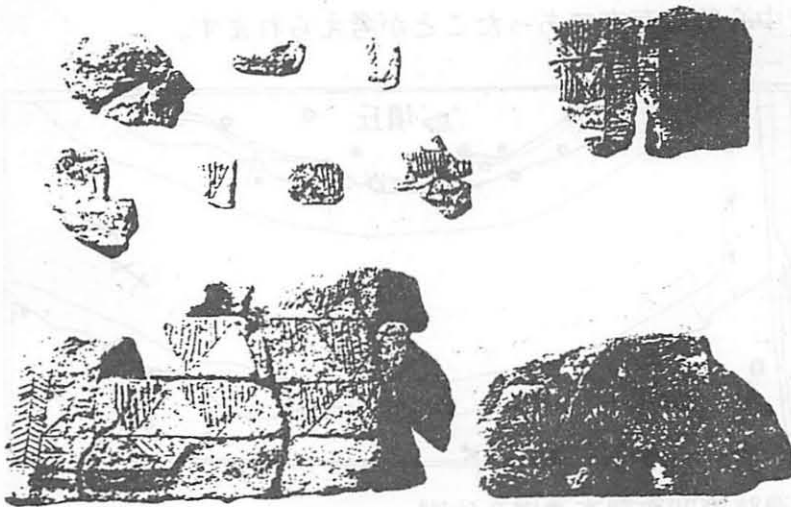
〒 524-02

守山市服部町2250番地

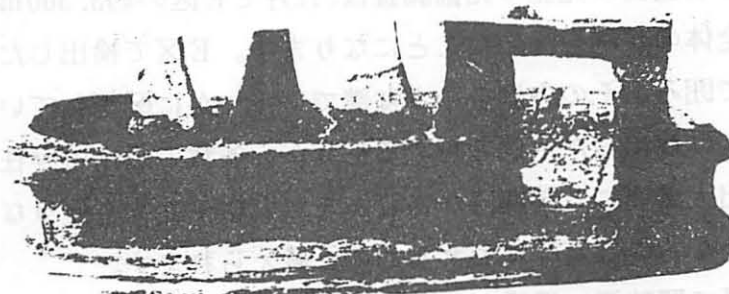
古墳の周濠から盾形埴輪が出土

1. 酒寺遺跡第30次調査

播磨田字下駒において、個人住宅建築に先立つ調査を1月20日から実施しました。3件分約545㎡の申請のうち208㎡の面積を対象に調査し、古墳跡、ピット、溝を検出しました。



盾形埴輪写真



家形埴輪写真

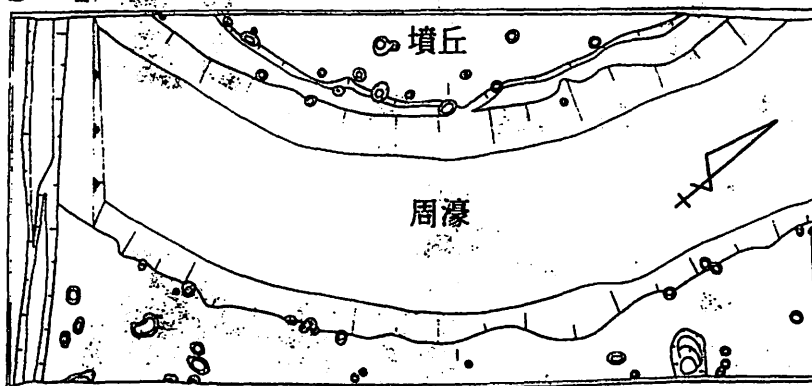
古墳の周濠の幅は約6mもあり、墳丘側で70cm～1mの幅でテラス状になっています。古墳は検出した周濠から直径約10.7m規模の円墳ではないかと考えられます。周濠からは須恵器の杯身、小型の壺、それに盾形埴輪や家形埴輪などの形象埴輪が多く出土しており、埴輪から5世紀前半の時期であると考えられます。

溝(SD-1)は調査区西端で検出しました。溝幅は約1mで、溝内から土師器皿が出土しています。時期は鎌倉時代と考えられます。

この100m南側の地点でも、区画整理事業に伴う調査で方墳が数基みついていることから、広範囲に古墳が築かれていたことがうかがえます。みついている方墳は一辺が10m前後と今回の古墳と同じ規模ですが、いずれも埴輪が出土していません。このことから、今回みつかった古墳が古墳群の中で中心的な存在であったことが考えられます。

SD-1

(畑本)



酒寺遺跡第30次調査遺構全体図

0 10m

2. 欲賀遺跡の調査

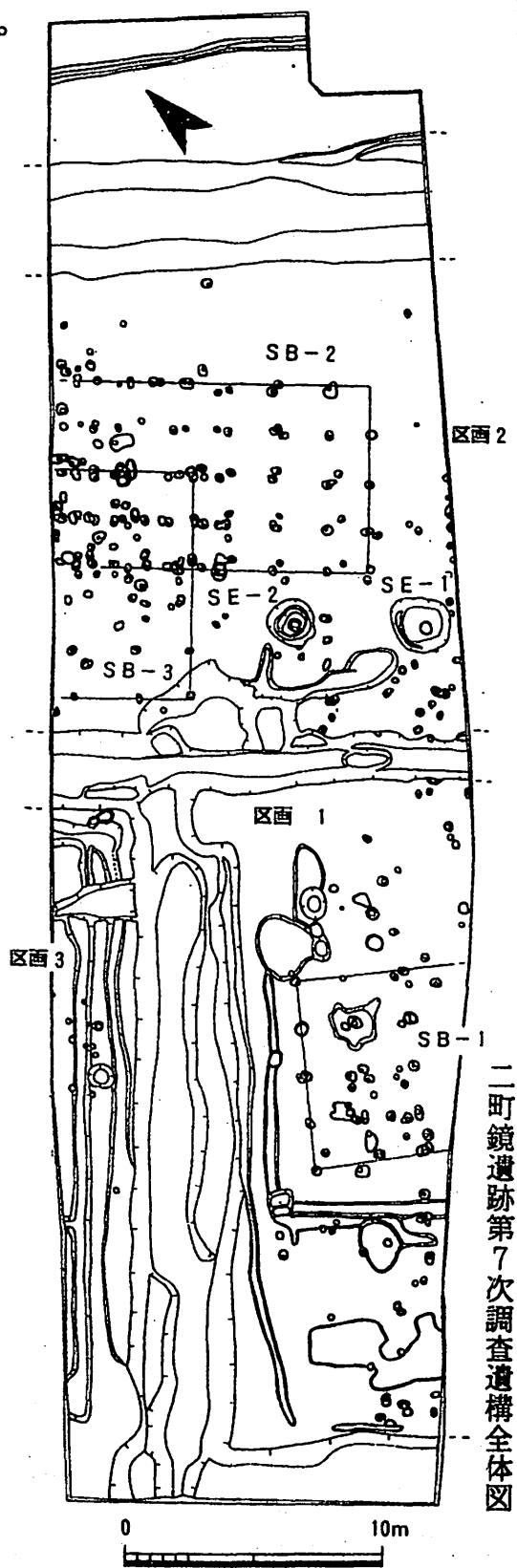
欲賀地区は場整備に先立つ発掘調査は、12月でE区の約3,300㎡が終了し、これで調査全体の8割を終えたこととなります。E区で検出した屋敷跡は3方を大溝で囲み、その内側を小さな溝でいくつかに区画しているようです。屋敷内には検出した千個を越える柱穴から多数の建物の存在が考えられますが、出土遺物にも時期差があり、また石組や曲物を使うなど井戸の構造のちがいから、数時期にわたるものと考えられます。

この調査区で興味深い遺構として、四角形の土壇が1基あります。土壇の大きさは長辺3.2m、短辺2.4m、深さ20cmで、建築材の一部が土壇いっ

ばいに広がった状態で出土しました。これは3本の木材にほぞをあけて横に棒を渡し、間に杉皮を張ったもので、鑑定から^い堀もしくは^{かきね}垣根と考えられるようです。出土状況から倒壊して埋まったとは考えられず、なぜ土壌に埋まっていたかは今のところ不明です。(畑本)

2. 二町鏡遺跡第7次調査

11月下旬から実施していた二町鏡遺跡(物部小学校南側100m)の調査は昨年末に終了しました。調査の結果、約1,000㎡の調査地から左の図にあるように、濠で区画する14世紀代の屋敷跡を3区画(区画1~3)検出しました。区画1からは5間×2間以上の母屋と考えられる建物(SB-1)を検出し、区画2からも重複する2棟の(SB-2、3)建物を検出しています。建物はいずれもほぼ同一地点から2穴以上の柱穴がみつまっていることや区画2では2基の井戸跡(SE-1、2)を検出していることから、建て替えを行っていたことが分かります。調査区の西及び南西側からは平成2・3年度の道路建設(第2・3次調査)に伴う調査で同様の屋敷跡が6区画検出されており、第5次調査(平成5年度)と今回の分を合わせると合計10区画の屋敷地が検出されたことにな



ります。これら屋敷地は濠で整然と区画割されていることから、かなり計画的に形成された村であったことがわかります。二町鏡遺跡に眠る集落は良好な状態で保存されていて、中世の村落を知る上で横江遺跡（横江町所在）のような貴重な遺跡であるといえます。（岩崎）

Ⅱ 調査中 Ⅱ

4. 大洲遺跡第5次調査

昨年10月から宅地造成工事に先立ち、調査を実施しています。現在、弥生時代後期の遺構面を調査しています。これまでに竪穴住居6棟、掘立柱建物7棟以上のほか、土壌などが検出されています。

竪穴住居は出土土器を検討した結果、SH-1～3は弥生時代後期後半、SH-4・5は弥生時代後期末、SH-6は古墳時代前期のものであることがわかりました。これらの竪穴住居は無数に検出されている柱穴群を切っけつくりされていることから、掘立柱建物群はそれ以前の遺構であると考えられます。現在、これらの柱穴を掘削しているのですが、ほとんど遺物が出土していません。しかし、いくつか出土した土器の破片からみて、弥生時代後期のものと考えられます。

掘立柱建物は1間×2間、1間×3間、2間×2間、2間×3間などの種類があります。床面積は11～19㎡ほどの小型の建物です。これらの建物は調査区の東北部の高い地域に集中していて、600㎡ほどの面積に千個を越える柱穴群が検出されています。これは



大洲遺跡第5次調査遺構全体図

何度も建物が建て替えられたことを示していると考えられます。

これまで、伊勢・大洲遺跡のなかでも、このように掘立柱建物が集中して検出された地点はみつかっていませんでした。これらの建物に住んでいた人々は伊勢遺跡の大型建物の造営に深くかかわっていたのかもしれませんが。

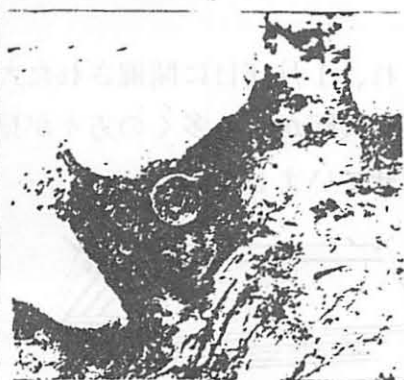
(伴野)

6. 伊勢遺跡第28次調査

区画整理工事に先立ち発掘調査を実施している伊勢遺跡で、これまでに弥生時代後期から鎌倉時代にかけての旧河道を検出しています。弥生時代後期の旧河道は栗東町野尻方面から東西方向に走り、西側微高地付近で蛇行して栗東町側に流れていたものと考えられます。旧河道の幅は約20m、深さは約2mの規模で、北東側の肩口付近から多量の土器が出土しています。出土した土器は壺・甕・鉢・高杯・器台があり、完形のものが多く含まれます。旧河道の南西側には、これまでの調査成果から底湿地が広がっていたと考えられ、ここが伊勢弥生集落の南西側の端と考えられます。

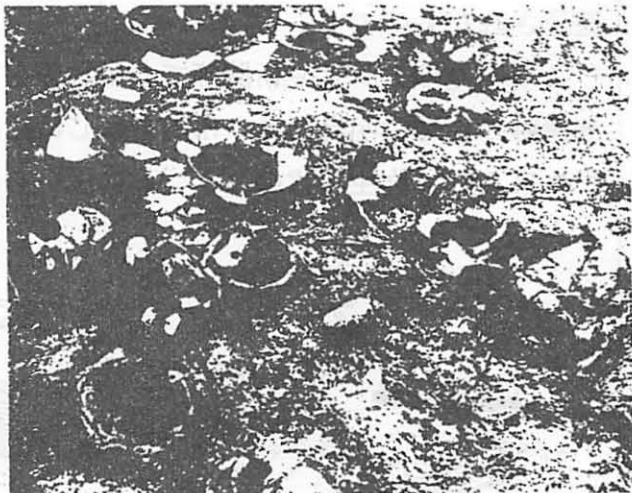
奈良時代から鎌倉時代にかけての旧河道群は北側微高地の縁辺を流れる現河川付近で検出しました。このうち、平安時代の旧河道の肩口付近からは祭祀にかかわると考えられる集石遺構が4箇所みついています。これは河原石や花崗岩を数個集めたもので、付近から「隆平永宝」(皇朝十二銭の一種) 1点や斎串状木製品2点が出土したのをはじめ、木片の燃えかすも旧河道内から出土しています。

(小島)



「隆平永宝」

出土状況写真



旧河道内弥生土器出土状況写真



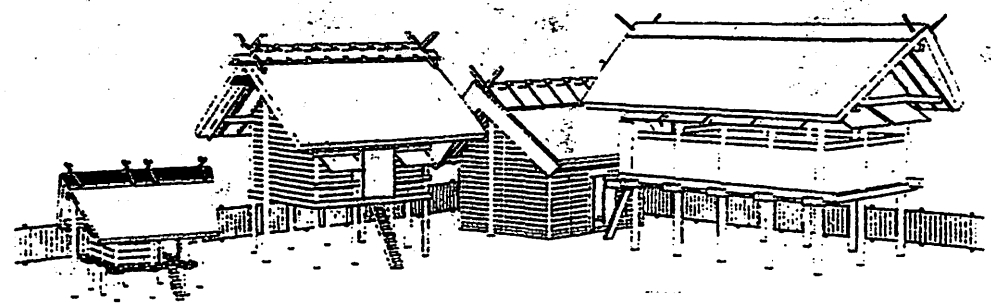
1. 酒寺遺跡
2. 欲賀遺跡
3. 二町鏡遺跡
4. 大洲遺跡
5. 伊勢遺跡

発掘調査位置図



☆ 全国初、弥生時代後期の方形区画を確認 ☆
 伊勢遺跡の中心部で、柵列で方形に区画した内部に複数の大型建物が整然と配置されていたことが確認されました。この地点は平成2年と4年に発掘調査が実施されていますが、今回調査成果を検討し直した結果、方形区画の存在が確認されたものです。

この発見はテレビや新聞等でも多数報道され、1月16日に開催された大洲遺跡の現地説明会には、市内をはじめ京都や大阪からも多くの方々が見学に来られ、弥生時代の『クニ』に思いをはせていました。



伊勢遺跡建物群復元想像図